

【特集：LD-SKAIPによる学習の評価と支援】2020年度公開講演会 講演録

読み書きにつまずきのある子どもに対する 学習支援の実際

林 真理佳

皆さんこんにちは。明星大学発達支援研究センター研究員の林真理佳と申します。私は長年、子どもの学習支援に関わる仕事や研究をしてまいりました。今日は私の専門である、読み書きに困難があるお子さんについてどのように見立て、それを指導や教材につなげていくか、というところをお話させていただきたいと思っております。

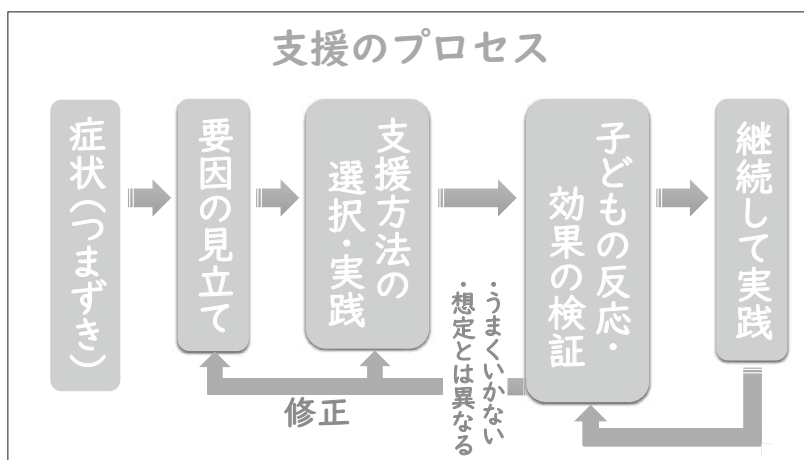
読み書きのつまずきと要因の見立て

こちらは発達になんらかの問題があるお子さんに対する支援の進め方を表した図になります(スライド1)。はじめに、つまずきや要因をどのように把握するかというところからご説明いたします。

子どものつまずきの詳細を把握したり、その要因について推測する際には、子どもに関わる情報をできるだけ多く集めるということがとても重要です。

私自身は、子どもの学習支援を始める前に保護者の方と面談をして、お子さんの発達や学習に関することだけではなく、興味や好き嫌いといった日常の様子なども伺うようにしています。それらの情報は、指導の内容を決めたり、教材を作成するための重要な材料になります。

そして、特に学習に関しましては、先ほど小貫先生の方からもお話がありましたが、この学習支援の地図を使うと、子どもの実態を整理して捉え



スライド1

ることができ、指導の方向性が見えやすくなると思います(スライド2)。

保護者の方に伺って得た情報に加え、この地図にある読み書きに必要な能力を、できるだけ負担が少なく、包括的にかつ詳細に把握するために、私どもは2つの検査を作成しました。

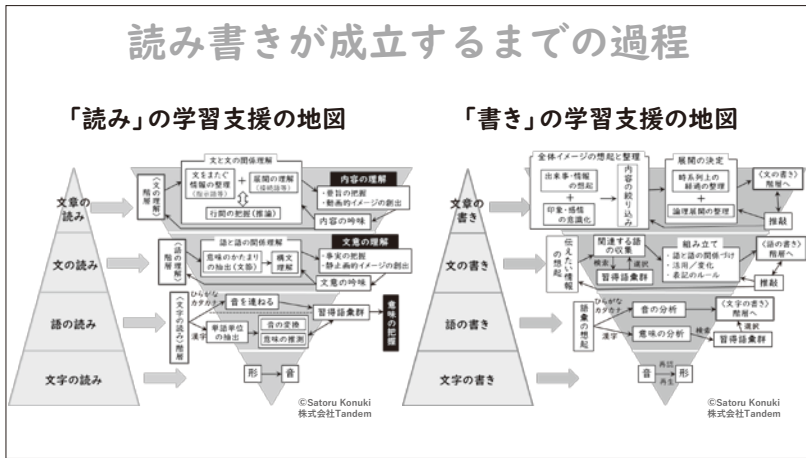
まず1つ目は、「読み書きのチェックリスト」です。子どもの学習の状態をよく知る大人の方、通常は担任の先生や通級の先生などになりますが、その方に行っていただきます。回答は「ほとんどない」か「よくある」の2択で選択する形式になっています。「よくある」にチェックがついた場合、

対応する地図の番号の部分につまずきが生じている可能性が考えられます(スライド3・4)。

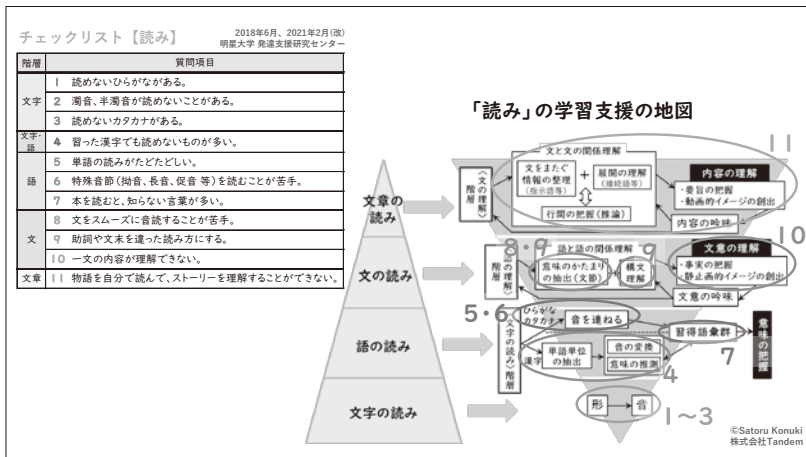
このチェックリストは、Tandem(タンデム)のホームページの方からも無料でダウンロードをしていただけます。そちらも御利用ください。

そして2つ目の検査は、子どもに直接実施する「読み書きの原因チェックテスト」です。このテストでは、つまずきがどこにあるのかを直接的に調べて、その要因を推測する手がかりを集めていきます。

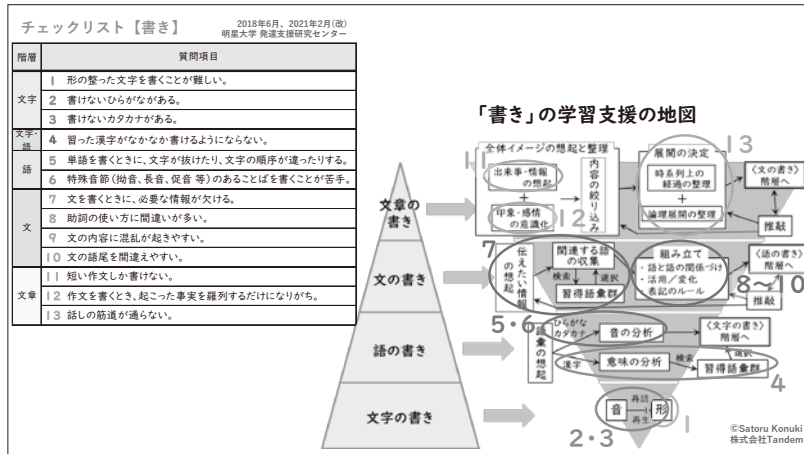
原因チェックテストは、読み書きそれぞれ約20の課題があります。スライド5・6の表には、



スライド2



スライド3



スライド4

テストで見ている力と地図との対応を示しています。

原因チェックテストのほとんどの問題は、その学年の子どもの大部分が正答できるようになっていますので、正答できなかった場合には、その課題で見ている力に何らかのつまずきがあると考えられます。

また、このテストは子どもに個別で実施するテストなので、問題を解いている最中の子どもの様子を観察したり、子どもが正答できなかった問題の誤り方を分析していくと、つまずきの原因を推測することもできます。

後に説明する事例の中で原因チェックテストの課題のいくつかをご覧いただきますが、このテストはできるだけ簡易に実施できるように作成しましたので、子どもにとっても検査者にとっても負担が少なく行えるようになっています。

読み書きの指導

ここまで、支援のプロセスにおける症状と要因の見立てについてお話をしました。次に、支援方法を実際に考えていくという段階について説明していきたいと思います。

学習のつまずきに対する指導には、大きく分けると3つの方法があります(スライド7)。

1つ目は、知識を増やすということです。読み書きにおける知識には、文字の形や音、語彙、文法などがあります。これらの知識は、単に頭の中に情報が蓄えられている状態のみならず、その情報を理解していることや、必要なときに正しく引き出して使えることが求められます。

2つ目は、学習を支えている認知的な力を育てるといふところになります。読み書きに関連する音韻意識、視覚認知、ワーキングメモリ、微細運動などといったスキルを、トレーニングして伸ばしていくというのが、この2つ目の支援です。

ここで1つお伝えしたいのですが、学習においてスキルトレーニングを取り入れる場合には、それだけを単独で行うのではなく、①や③の支援と併用する形で行い、全体として学習のつまずきに対処していただくことが望ましいと考えています。

皆さんには、いわゆる運動神経を例に考えていただくとわかりやすいと思うのですが、生来備わっている認知の力や、その伸びしろは、個人個人でだいぶ差があるところです。また、その認知の力を伸ばしていくためには、ある程度の期間をかけて継続的にトレーニングする必要があります。苦手なことをやり続けるためには、本人のモチベーションや努力が欠かせません。ですので、スキルトレーニングは決して無理強いをせず、子どもが前向きに続けられるようであれば、取り入

読み書きの原因チェックテスト

2017年、2019年(改)
明星大学 発達支援研究センター

原因チェックテスト【読み】

階層	地図の部分	原因チェックテストで見ている力
文字	① 形を捉える力	線・形の弁別 / 文字の弁別
	② 音を聞き分ける力、操作する力	文字の音の操作
	③ 文字を音に変換する力	ひらがな・カタカナの清音・濁半濁音・拗音
語	④ 単語を音に変換する力	ひらがな単語の音読(特殊音節含む) / 漢字単語の読みや意味
	⑤ 単語をまとまりで流暢に読む力	ひらがな・漢字の言葉区切り
	⑥ 語彙の力	類義語選び
文	⑦ 文節を把握する力	文節区切り
	⑧ 助詞の働きを理解する力	助詞の働きや意味
	⑨ 修飾-被修飾の関係を理解する力	語と語の関係
文章	⑩ 時制を理解する力	時制をあらわす言葉や活用
	⑪ 指示語を理解する力	指示語が指す内容
	⑫ 接続語の働きを理解する力	接続語の働き

スライド5

原因チェックテスト【書き】

2017年、2019年(改)
明星大学 発達支援研究センター

原因チェックテスト【書き】

階層	地図の部分	原因チェックテストで見ている力
文字	① 形を正しく書く力	文字の画の視写 / 文字の形の再認(ひらがな・漢字)
	② 音から文字を思い出す力	ひらがな・カタカナの清音・濁半濁音・拗音
語	③ 単語の音を分解する力	言葉のモーラの数・文字の順番(清音・濁半濁音の単語 / 特殊音節を含む単語)
	④ 特殊音節の音を正しく表記する力	特殊音節の表記の訂正
	⑤ カタカナ単語を正しく書く力	カタカナ語の選択
	⑥ 漢字の意味や読みを検討する力	漢字単語の再認(熟語・送り仮名)
文	⑦ 伝えるための語彙の力	状況を表す言葉選び
	⑧ 正しい助詞を使用する力	助詞の選択
	⑨ 文を正しく組み立てる力	文の組み立て
	⑩ 時制を理解する力	時制に合う活用の選択
	⑪ 表記ルールの知識	句読点の表記
文章	⑫ テーマに沿って内容を絞り込む力	場面に合わない文の選択
	⑬ 時系列に沿って書く力	文の順序の確認

スライド6

学習のつまずきに対する指導

① **知識を増やす**

理解と使用

文字の形や音・語彙・文法 等

② **認知的な力を育てる**

スキルトレーニング

音韻意識・視覚認知・ワーキングメモリ・微細運動 等

③ **使えるリソースを増やす**

代替手段

ICT機器(検索・読み上げ・文字入力) 等

スライド7

ました。地図の点線で囲っている部分はチェックリストでつまずきがよくあるとされた箇所、実線の丸は原因チェックテストで誤りが見られた部分です。

これら検査結果に事前の情報も踏まえると、まず、文字や単語の読みには大きなつまずきがあり、その背景には音韻意識の弱さがありそうだということが考えられます。さらに、単語の意味や、文の意味の理解（語の読み・文の読みの右部分）については問題がなさそうだということも見えてきます。

また、スライド10は子どもに直接実施する原因チェックテストの1枚で、文字の形を捉える力を見る課題になります。○がこの事例の子どもの解答ですが、矢印箇所にあるように「しゃ」と「しや」が同じであると認識されています。こういった誤りから、このお子さんは、「し」と「ゃ」がセットで1つの塊であるということ、つまり、「拗音が1モーラである」という知識がまだ獲得できていないのだろうと考えました。

ここまで集めた情報に基づいて、この子どもが今、身につけておくべき能力は何かを検討したところ、個別の指導では、まず「拗音の読み」を扱うということになりました(スライド11)。

スライド12は、表記と音の仕組みを学ぶ教材としてパワーポイントで作成したものです。アニメーションを再生すると○や□の図形と手を打つ音が同時にできるようになっており、清音の「き、や」と拗音の「きゃ」の違いを視覚と音の両方で感じられるようにしています。同様の形式で単語バージョンも作成します。さらに、「きやべつ」と「きゃべつ」の表記のうちどちらが正しいかを選ぶ課題などを行います。

私はコロナ禍にZoomで個別指導を行うようになり、パワーポイントを使って教材を作るようになったのですが、通常の対面指導においても教材をパワーポイントで作成するメリットがたくさんあると気づきました。例えば、情報を提示するタイミングを自由に決められる、視覚情報と音声情報を同時に提示することができる、テンポよく学習を進められるため子どもの注意を惹きつけやすい、などが挙げられます。

また、Tandemのホームページでは、学習支援の地図に紐づけた形でプリント教材サンプルを公開しております。この事例の指導では、「単語を音に正しく変換する力(拗音①)」の3枚を1セットとして行う教材を使用しています。

原因チェックテスト【読み】

文字階層 <形を捉える力>

さ ば しゃ

き	さ	ば	ば	しゃ	しゅ
ち	き	ぼ	は	しゃ	しゃ
き	さ	ぼ	ほ	しゅ	しゃ
さ	ち	ぼ	ば	しゅ	しゅ

【子どもの回答から推測されること】

- ✓ 文字の形の弁別はできている
- ✓ 清音と拗音(「や」の大きさ)の違いに気づいていない
- “拗音が1モーラである”という知識が獲得できていない

スライド10

指導内容の検討

- ✓ 音韻意識の弱さがあると考えられる。
- ✓ 書かれた文字を読むことの難さがある。
- ✓ 日常生活の中で、ひらがなの拗音を読めないことによる不便さは大きいと考えられる。
- ✓ 単語や文を書く際、文字を入力する（音声入力を除く）際にも、拗音の文字⇔音対応の知識は必要である。
- ✓ 現在、低学年である。

➡ 個別指導では、まず「拗音の読み」を扱う

スライド11

拗音の表記と音（モーラ）の知識を身につける

アニメーション ウィンドウ

▶ すべて再生

1音 ★ 橋円 12

▶ Clap01-1

2音 ★ 橋円 11

▶ Clap01-1

3音 ★ フローチャート: 誰...

▶ Clap01-1

【HP（無料ダウンロード音源）】
『OtoLogic』 ~手を叩く~
<https://otologic.jp/>

スライド12

拗音の表記と音の対応

『ぷりんときっず』 ~ひらがなカード~
<https://print-kids.net/print/kokugo/hiragana-card/>

りゆ	しゆ	ひや	きよ				
きゆ	にや	しよ	ちゆ				
ちよ	ひよ	きや	にゆ				
りよ	しや	みや	ちや	みや	ひや	しよ	にや
			しゆ	ちや	きゆ	りゆ	
			ひよ	きよ	にゆ	ちよ	
			きや	ちゆ	りよ	しや	

ひらがな スカード スカードは切り取ってご利用ください。

ぱ ばん	ぴ びまん	ぷ ぷりん	ぺ ペリかん	ぽ ぽてと
つ らっこ	きゃ きゃべつ	きゆ きゅうり	きよ きょうりゅう	ぎや ぎやんぶる

↑ 1枚ずつ切り取って使用する

スライド13

前出のような教材で拗音の知識を教えた後に、ゲーム形式の課題を行い、さらに音と表記の対応の定着を図るといったようなこともします。スライド13のビンゴでは、右のカードを裏返しにして選び、それを子どもには見せないようにして、指導者が音声のみで伝えるという方法で行うと、身につけてない拗音を確認することもできます。

この教材（ひらがなえカード）は『ぶりんときっず』のサイトに掲載されています。こちらのサイトには、無料でダウンロードできる学習教材がたくさんあります。かわいいイラストのものが多く、子どもが楽しく取り組めると感じています。

また、先ほど、学習のつまずきに対する指導方法の2つ目にスキルトレーニングがあるというお話をさせていただきましたが、音韻意識に弱さがあるお子さんの場合、しりとり、逆さ言葉、文字数すごろく、「た」ぬき文などといった言葉遊びはスキルを育てるトレーニングになります。子どもも楽しく取り組んでくれて指導のメリハリにもなるので、私もよく取り入れています。

【事例2】

小学4年生のお子さんで読むこと全般が苦手だという主訴で来られました。概要はスライド14の通りです。

このお子さんにチェックリストと原因チェックテストを行った結果をスライド15に示しています。地図の点線で囲っている部分はチェックリストでつまずきがよくあるとされた箇所、実線の丸は原因チェックテストで誤りが見られた部分です。

これらの情報から見えたことは、今の時点では仮名文字に多少読みづらさがありそうだということ、そして、漢字や文、文章の階層の意味理解の問題がとても大きそうだということです。

スライド16は原因チェックテストの1枚で、語彙の力を見る課題になります。○は子どもの解答です。これを見ると、1つ1つの単語の意味を誤って捉えているわけではなさそうですが、カテゴリー化や概念の発達といったところに問題があるかもしれないと推察されます。

また、スライド17は語と語の関係を理解する力を見るテストで、文意に合う絵を選ぶ課題ですが、4問中2問が誤答でした（□で囲った問題）。ここから、助詞の働きや修飾－被修飾の関係の理解が不十分であることがわかります。そして、こういったこと背景には、抽象的な事柄の理解に弱さがあるのではないかと推測しました。

ここまで集めてきた情報に基づいて、今後この

事例2の概要

児童：小学4年生

主訴：読むこと全般が苦手

普段の様子：

- ・ 意味を知らない言葉が多い
- ・ 指示や説明の理解が難しいことがよくある
- ・ 会話中、質問と回答がかみ合っていないことがよくある

スライド14

お子さんに対してどのような指導をしたらよいか検討したところ、「語彙を増やす」ところと、「文法の知識を身に付ける」ところの2点を行うことになりました(スライド18)。

カテゴリーごとに言葉を学ぶというところに関しては、ネット上に無料でダウンロードできる教材がたくさん公開されているホームページがあります。特に、言葉とイラストがセットになっている教材は語彙の学習に大変役立つと思います。

スライド19は『ちびむすドリル』のサイトにある教材です。的を射た教材や素材が豊富に揃っていると感じていて、私もよく利用させていただいています。スライドには教材を2つご紹介しておりますが、この他にも語彙の学習に関する教材がたくさん掲載されています。

スライド20は『ぶりんときっず』の教材です。生き物を上位カテゴリーから下位カテゴリーへ分類するというを通して、概念形成を促す学びにもなると思います。カード教材はいろんな使い方を楽しめると思うので、子どもに遊び方を考えてもらうというのもよいかと思います。

スライド21はTandemのホームページで公開している教材になります。子どもには、読みから

漢字を選んでもらう形になっているのですが、旗の立っているグリーンが類義語ごとに分かれています。さらに次のページでは、同じ文の空欄に入る2つの単語を選んでもらう課題を行い、類義語の知識を増やしたり、類義語というものがどんなものであるのかということを知るようにしています。

スライド22は助詞の働きを身につける教材です。抽象的な意味理解が難しいお子さんの場合、このくらいの小さいステップで進めていくというのはとても大切だと思います。この教材は、助詞をつけた場合の語と語の関係性にどんな共通点があるのかを、子どもが把握しやすいように、日常生活の中でよく経験するような身近な事柄を問題に使用しています。また、問題を解いた後、指導者の後に続いて正しい文を声に出して読んでもらうことも効果的だと思います(助詞を強調して読むとよい)。目で見ると、耳で聞く、声に出すといったように様々な感覚を用いて、理解力や表現力の向上を促していきます。

【事例3】

書きの主訴で来られた小学1年生のお子さんです。概要はスライド23の通りです。

指導内容の検討

- ✓ 音韻意識に多少の弱さはあるかもしれない。
- ✓ 漢字の読みの苦手さの背景には、抽象的な事柄を理解することの弱さが関係している可能性がある。
- ✓ 生活の中でも、言語理解や言語表現に難しさが見られている。
- ✓ 文を理解する力や相手に伝える表現の力を伸ばす上で、日常よく使用する語の意味や文法の知識を獲得することは必要。
- ✓ 意味理解(特に、抽象的な事柄の理解)については、他の手段(ICT機器や検索等)で代替することが難しい。

➡ 個別指導では、「語彙を増やす」「文法知識を身につける」ことを優先する

スライド18

事例3の概要

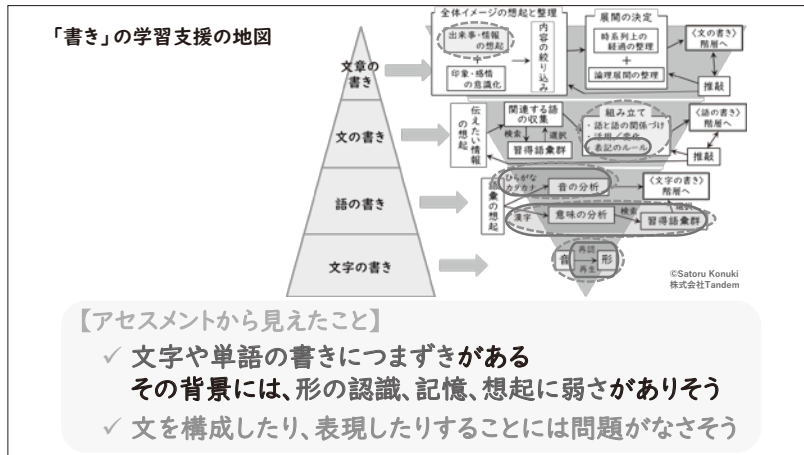
児童：小学1年生

主訴：ひらがな(清音)の書きが定着しない

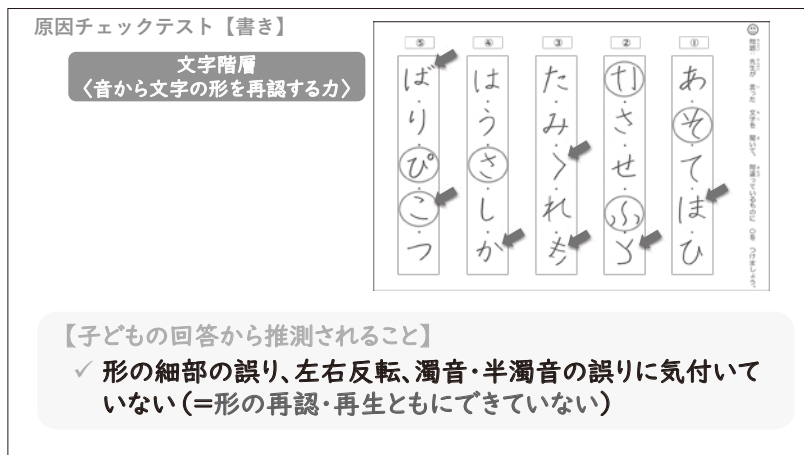
普段の様子：

- ・間違い探しが苦手
- ・形や音の似ている文字をよく書き間違える
- ・視写(お手本を見ながら書くこと)は上手
- ・日常会話での表現に問題はない

スライド23



スライド24



スライド25

指導内容の検討

- ✓ 形を認識すること、記憶すること、想起することに弱さがあると考えられる。
- ✓ 微細運動(手先を動かす動作)には問題ないと思われる。
- ✓ 日常生活の中で、ひらがなを書けないことによる不便さは大きいと考えられる。
- ✓ 文字を入力する(音声入力は除く)際でも、音から形を思い出すことは必要である。
- ✓ 現在、小学1年生である。

➡ 個別指導では、「ひらがな清音の書き」の定着を図るとともに、「ビジョントレーニング」を取り入れる

スライド26

文字の形を思い出すための手がかりをつくる



スライド27

株式会社Tandem <文字がうまく書けない子への教材>

【文字階層】音から文字を思い出すカ(形の弁別)



スライド28

『ぷりんときっず』のホームページにも「似ている文字」の学習プリントが出ていますので、見てみてください (<https://print-kids.net/print/kokugoniteiru-hiragana-katakana/>)。

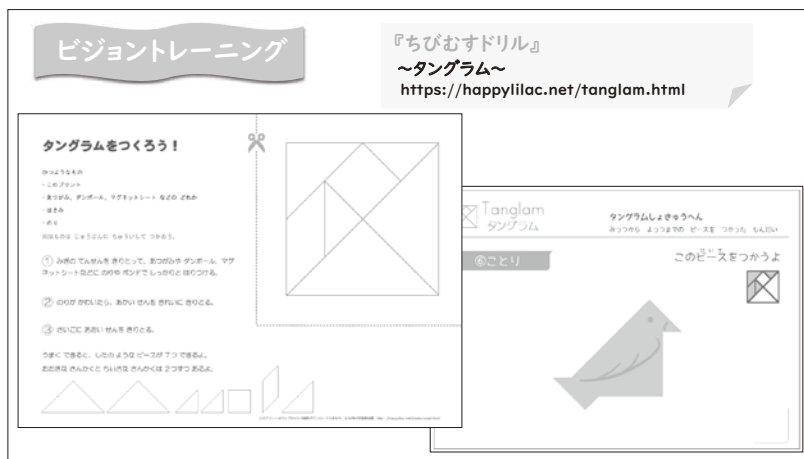
スライド29・30は、ビジョントレーニングで使った教材です。この子の場合は、形や空間の認知がとても苦手だったので、このようなタングラムという教材や、間違い探し、見本を見ながら点をつなぐという教材などを使用しました。

また、佐賀県の教育センターのサイトに掲載されている『平成22年度の見る能力を高めるトレー

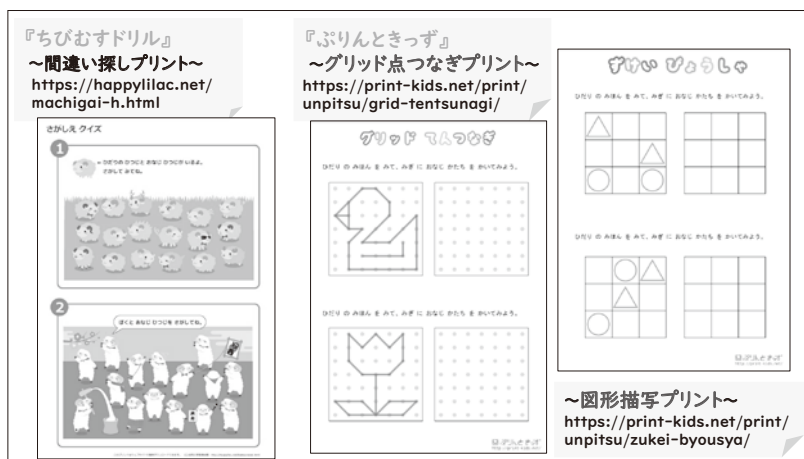
ニングの研究』のページには、視覚認知に関してアセスメントからトレーニングの実践まで、情報が詳細にわかりやすくまとめられています。ビジョントレーニングにご興味のある方は是非ご覧いただければと思います (https://www.saga-ed.jp/kenkyu/kenkyu_chousa/h22/10_tokubetsusen/index.html)。

【事例4】

最後の事例は、小学校6年生のお子さんで、漢字を書くことや作文に苦手が見られるという主訴でした(スライド31)。



スライド29



スライド30

このお子さんにチェックリストと原因チェックテストを行った結果をスライド32に示しました。地図の点線で囲っている部分はチェックリストでつまずきがよくあるとされた箇所、実線の丸は原因チェックテストで誤りが見られた部分です。

アセスメントでは、つまずきがあるところだけでなく、出来ている部分についての情報も重要になります。このお子さんの場合、周囲の大人からの情報では、書くこと全般に苦手があるとのことでしたが、子ども自身が行ったテストでは、ひらがな文字の形の再認や日常的に馴染みのある言語の使用にはつまずきがありませんでした。また、読みに関する周囲からの聞き取りでは、文章の意味理解の辺りにも困難がありそうとの情報が得られました。これらのことから、全般的な知的発達が少しゆっくりであることが推察されました。そして知能検査を行ったところ、境界域という結果でした。

スライド33は、上記テストのうち、伝えるための語彙の力を見る課題の子どもの解答です。上の絵を説明するために必要な語をすべて選んでもらいます。右の問題では「お母さん」や「花」といった具体物や目に見えているものは選べているのですが、「わたす」という動詞が選べていません。また、左の問題では、「犬」を主体にしてその視

点から「えさ」を「くわえる」というイメージで解答したかもしれない、というようなことが推測できます（正答：「ぼく」「犬」「えさ」「あげる」）。

ここまで集めた情報に基づいて、この子どもが今身につけておくべきものは何かと考えたところ、個別の指導では漢字の意味に注目すること、及び、状況が相手に伝わる文を作ることを目標にしました（スライド34）。

先ほど小貫先生も話されていましたが、現在、私たち大人が日常生活で文字を手書きで書かなくてはいけない場面は、それほど多くはありません。また、手書きが必要な場合でも、漢字を思い出せないときにはスマホなどですぐに検索することができます。そのため、漢字を一から自分で思い出して書くことを習得するのが大変なお子さんの場合には、「読みから意味に合う正しい漢字が選べる」という力を身に付けてもらうための教材を使用したりしています。（例：こうえんで遊ぶ。〔公園／校園〕、朝はやく起きる。〔早く／速く〕）

スライド35・36はTandemのホームページに掲載予定の教材です。意味が対になっている漢字2文字を取り上げて、漢字の意味を意識しながら読み書きを学べるようになっています。

事例4の概要

児童：小学6年生

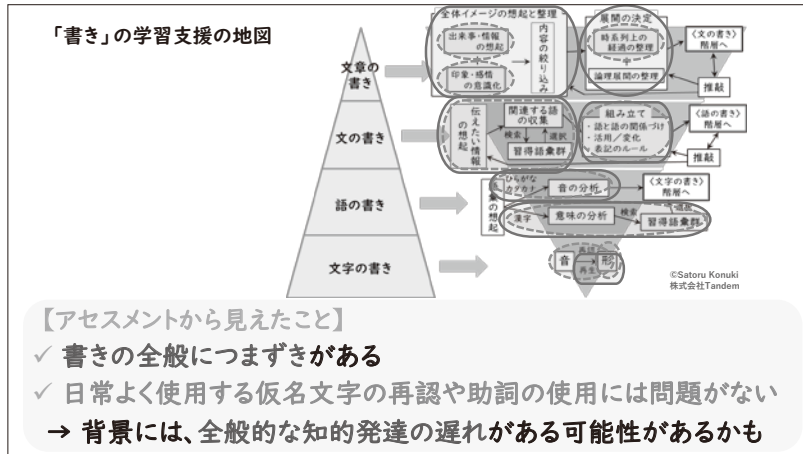
主訴：書ける漢字が少ない

作文や日記では、必要な情報が欠けている

普段の様子：

- ・周囲の状況を見て動くことが苦手
- ・場面の状況を相手に伝わるように話すことが苦手
- ・読みのつまずきも見られる

スライド31



スライド32

原因チェックテスト【書き】

文階層 〈伝えるための語彙の力〉

【子どもの回答から推測されること】

- ✓ 目に見えていない情報を推測することが難しい
- ✓ 情報を客観的に捉えることの難しさがあるかもしれない

スライド33

指導内容の検討

- ✓ 全般的な知的発達が遅れがある可能性が考えられる。
- ✓ 読み・書き全般につまずきがある。
- ✓ 慣れ親しんで行っていることは身につきやすい。
- ✓ 意味理解や推理・思考（他者の視点を意識すること、抽象的な事柄の理解等）の力に弱さがあると考えられる。
- ✓ 文字入力においても、同訓異字・同音異義語の選択は必要。
- ✓ 現在、小学6年生である。

➡ 個別指導では、「漢字の意味に注目する」課題、及び「状況が相手に伝わる文作り」を扱う

スライド34

相手に伝えるために必要な情報を知る指導として、言葉表からいくつか語を選んで組み合わせ、絵に合う文を作るというような課題が『ぷりんときっず』のページにあります(スライド37)。こういった方法で、自分が見ている状況を正しく相手に伝えることを学べると思います。

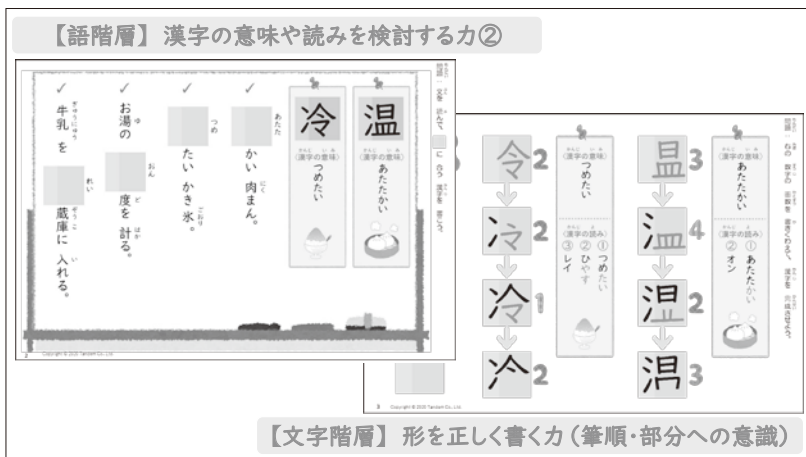
スライド38はTamdemに掲載予定の教材です。1枚目は、イラストについて説明をするために必要な単語をできるだけ多くあげてもらおうという課題になっています。事例4のように、動作や様子など、目に見えにくい抽象的な言葉が出にくいお子さんの場合は、指導者の方から「何をしてる？」

とか、「どんな顔？」などという質問をして促したりもします。そして2ページ目で、先ほど挙げた単語を使ってイラストの状況を口頭で説明してもらおうというようなことをしていきます。

ここまで読み書きの学習支援の事例を4つ見ていただきましたが、学習につまずきがある子どもの指導では、いかに脳をうまく働かせるかということ、指導者が意識をしながら行うことも大切だと思っています(スライド39)。今日ご紹介した教材も、このようなことを頭に入れて作成したり、選んだりしています。



スライド35



スライド36

相手に伝えるために必要な情報を知る

『ぶりんときつず』
～文を作ろうプリント～
<https://print-kids.net/print/kokugo/bun-tsukurou/>

スライド37

株式会社Tandem <文がうまく書けない子への教材>

【文階層】 伝えるための語彙の力 (必要な語)

スライド38

また、読み書きの力が弱いお子さんには、指導でつまずきのある部分を伸ばしていくことに加え、スライド40・41のようなサポート手段を考えると大変重要になります。サポート手段や合理的配慮については、他にも詳しく書かれている書籍等がたくさんありますので、お調べいただければと思います。

自身の価値観を育み、それを軸に生きていくことなのではないかと思います。学習支援は、そういった力を育むための1つの手段として行っているのだと感じています。

私の講義はここまでとさせていただきます。ご清聴いただき、どうもありがとうございました。

ここ一年、コロナの影響で社会全体が大きく動いています。このような状況の中で、今後求められるのは、すべてをまんべんなく、そつなくこなすということではなく、それぞれ個々が大事にしていることや、得意なこと、できることを見つけ、

脳をうまく機能させるために

- ・ 楽しく、前向きに取り組めるようにする
 〈例〉 本人の好み(アニメ・動画)や希望(できるようになりたいこと・将来の夢)を取り入れる、
 無誤学習(error less learning) 等
- ・ 思い出す際の手がかりをたくさん作る
 〈例〉 意味づけをする, 動作化する 等
- ・ 重要であると脳に認識させる
 〈例〉 同じ情報に何度も触れる, 感情を付随させる 等

スライド39

今後の子どもの学習・生活のために

読みのサポート手段	
〈目で読む苦しさに対して〉	<ul style="list-style-type: none"> ・ デジタルの本を使う。(デジジ教科書等) ・ ICT機器(パソコン、スマホ、タブレット等)の読み上げ機能を使う。 ・ 文章や設問などを、教師や周りの大人が読み上げる。
※子どもが自分で読む必要がある場合	<ul style="list-style-type: none"> ・ 見やすく書かれた文章を渡す。 (文字を大きくする、行間スペースを広めにとる、分かち書きにする等) ・ 文章の語のまとまりや助詞を捉えやすくする工夫をする。 (文節を線で区切る、助詞にマーカーで色をつける等) ・ 文章を見やすくするための道具を試してみる。 (見る行の文字を拡大する定規、スリットシート等) ・ 黙読での学習参加も認める。
〈漢字の読みの苦しさに対して〉	<ul style="list-style-type: none"> ・ 振り仮名をつける。 ・ 読めない漢字はその場で手軽に調べられるようにする。 (電子辞書、PCやタブレットの手書き入力等)
〈ワーキングメモリの弱さに対して〉	<ul style="list-style-type: none"> ・ 一度に提示する情報の量を減らす ・ いつでも確認できるように手順や対応表(50音表)等を置いておく

スライド40

書きのサポート手段	
〈手で書く苦しさに対して〉	<ul style="list-style-type: none"> ・ 板書：カメラ撮影を認める。／キーワードだけを書き込むワークシートを用意する。 ・ 予定：カメラ撮影を認める。／ICレコーダーに声で録音する。 ・ 自分の考えを書く：ICT機器(パソコン、スマホ、タブレット等)で入力する。／ 口頭で伝えて代筆してもらう。
※子どもが自分で書く必要がある場合	<ul style="list-style-type: none"> ・ 書く前のウォーミングアップとして、指先を細かく動かす動作をする。 ・ 書くスペースを大きくとる。 ・ 書く時間を長めに設ける。 ・ 持ちやすい鉛筆やグリップを使う。 ・ 文字の形の練習：大きい文字の見本をノートの近くに置く。／ 1マス分がくりぬかれたフレームをあてて書く。 ・ 多少の文字の崩れやバランスの乱れがあっても良いとする。
〈文字の想起の苦しさに対して〉	<ul style="list-style-type: none"> ・ その場ですぐに確認できる手段を手元に置くことを認める。 (ひらがな・カタカナの50音表、濁音・半濁音・拗音の表、新出漢字一覧表、電子辞書等)
〈ワーキングメモリの弱さに対して〉	<ul style="list-style-type: none"> ・ 一度に提示する情報の量を減らす。 ・ 作文は、1つ1つのプロセスに分けて順を追って行う。 (アイデア出し→文の組み立て→句読点を打つ→校正)

スライド41

学習に困難がある子どもへの支援を 考える上で大切なこと

- どこに、どれだけの時間をかけるか
→ この子どもにとって必要なスキル・知識とは？
- より効率的に身につける方法
→ 本人の努力任せにしない



スライド42